

城郭観光におけるバリアフリーに関する研究

今日、交通機関や建築物のバリアフリー化が徐々に広がり、高齢者や身体障害者の外出も次第に増えてきている。日常生活だけでなく観光分野においてもバリアフリーの重要性が考えられ始め、「バリアフリー観光」という言葉も使われるようになってきている。しかし、障害者や高齢者が世界文化遺産や文化財を観光することと、バリアフリー、ユニバーサルデザインを関連づけた先行研究は見当たらない。そこで本研究は、世界文化遺産や文化財の代表として姫路城、大阪城、彦根城の三つの城郭を対象とし、バリアの多さを評価した。採点項目は段差、傾斜、通路幅、手すり、トイレの5項目とし、0～3点の4段階でチェックシートを作成した。車椅子を用いて実地調査を行い、現状の把握と問題点の抽出を行った。結果は、大阪城が最もバリアが少なく、ボランティアガイドが城内を巡回しているなど案内や説明などのソフト面でも秀でていた。姫路城と彦根城では多くのバリアが存在し、ソフト面での取り組みも不十分であった。バリアの多くは段差と傾斜であった。歴史的価値を守るため、文化財保護法により城郭の構造に直接手を加えることは困難である。そこで、バリアフリー観光を実現するには建築学的な領域でのアイデアや工夫、マンパワーによる援助などが有効ではないかと考えた。国宝で初めて仮設スロープを設置した善光寺(長野県長野市)、マンパワーでの援助を実践している金毘羅宮(香川県琴平町)を参考にして環境整備を行えば、高齢者や障害者が文化的活動を円滑に行いやすくなる。